

James M. Simms :
*The First Colored Baptist
Church in North America*

斎藤忠利

アメリカ黒人の間にバプテスト派の信徒が多いことは良く知られた事実であるが、それは伝統的にバプテスト派のキリスト教会が布教に熱心であった、という理由だけからではない。それにはバプテスト派のキリスト教会の教会政治もしくは教会観が深くかかわっており、たとえば、正規の神学教育を受けていない平信徒が、その靈性と弁説の才を買われて按手札を授けられ、いわゆる 'lay preacher' (平信徒の説教者) として講壇に立ち、また、牧師に任ぜられる、というバプテスト派の慣行は、奴隷制下のアメリカの南部諸州において、黒人奴隷が、奴隷の身分のまま、教会を牧することを可能としたし、また、キリスト教の教理についての知識よりも宗教体験を重んずる傾向は、文盲の黒人奴隷にも信仰による救いの体験を享受させ、さらにバプテスト派が、あるべきバプテスマの形式として固執する 'immersion' (「浸礼」) [全身を水に浸す洗礼法] は、その原始的なところが、アフリカの宗教儀式にも似たものとして、アメリカの黒人大衆にアピールしたことは、疑い得ないところである。

アメリカ最初の黒人バプテスト教会は、1788年1月20日、当時は奴隷州であったジョージア州のサヴァンナ(Savannah, Georgia) に設立されたとされるが、本書は、その教会の設立百年を記念して、1888年の時点で会員数は2,000人以上、また、ジョージア州内

の同じ群の黒人教会数は1,400、信徒数は16万人を擁するに至った黒人バプテスト派の出発点となったこの初代教会の歴史を、集められる限りの資料に即して記録したものである。著者のジェイムズ・M・シムズ (James M. Simms) は、聖職者として按手札を受けており、この時、百年目を迎えた初代教会の役員 (Trustees) の一人であった。

[なお、因に、かつて W. E. B. ドゥボイスは次のように書いている——「…1890年の国勢調査によれば、この国には2万4千ほどの黒人教会があり、総数250万以上の黒人たちがそれらの教会の会員として登録されていた。言いかえれば、28人につき10人が実際に教会員であり、また、いくつかの南部の州では、2人のうち1人は教会員であった。この教会に関して二つの特徴的な事柄が注目されなくてはならない。第一に、それは信仰の点で殆ど全面的にバプテスト派とメソディスト派になったことである。第二に、社会制度としてそれは一夫一婦制の黒人家庭の出現に先立つこと数十年にも及ぶ、ということである。この教会は、それが始まったときのそもその事情からして、大農園に限定されており、主に一連の相互に関連を絶たれた単位から成り立っていた。その後、ある程度の移動の自由は許されるようになったとは言え、それでもやはり、この地理上の制約は常に重要であったし、奴隷たちの間に中央集権的で

ない、民主主義的なバプテスト派の信仰が広まった一つの原因となった。同時に可視的なバプテスマの儀式が、奴隷たちの神秘的な体質に強く訴えた。今日、[1903年の時点で]バプテスト教会は、黒人たちの間で相変わらず会員数が最大であり、聖餐にあずかる会員数150万人を擁している。] [W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk* (1903) pp. 215-217]

さて、アメリカ最初の黒人バプテスト教会の歴史は、1750年頃ヴァージニア植民地で生まれた黒人ジョージ・リール (George Liele) が、アメリカの独立戦争の暫く前に主人のヘンリー・シャープ (Henry Sharpe) に連れられて、今日のジョージア州に移った時にまで遡る。ジョージの主人はバプテスト派の信徒で、主人の属する教会の牧師の説教を聞く機会があったジョージは1774年頃、キリスト教に帰依し、その後間もなくバプテスマを受け、教会員として迎えられた。

この黒人奴隷ジョージはやがて、霊的な賜物を与えられていることが知られて、サヴァンナ川沿いの大農園で説教をするようになり、ときには聖日の夕拝に、自分の所属する教会で白人信徒たちを前にして説教することもあった。主人はジョージに自由を与え、独立戦争で主人が戦死すると、ジョージはイギリス軍の士官の好意で1783年の7月にジャマイカ島に渡ろうとするが、船がサヴァンナ川の河口で動けなくなったので、やむなくサヴァンナ市に赴き、そこで黒人奴隷のアンドルー・ブライアン (Andrew Bryan) とその妻ハンナ (Hannah)、ケイト・ホッグ (Kate Hogg) とハガー・シンプソン (Hagar Simpson) を信仰に導き、バプテスマを授け、その後、いずこともなく姿を消してしまった。

バプテスマを受けて約9ヶ月後、アンドルー・ブライアンは、その兄弟、友人、また少数ではあるが白人たちにもキリスト教信仰を

説き、これを見たアンドルーの主人は、木造の建物を建てて、そこで黒人奴隷たちに礼拝を守ることを許した。

ところで、この前後のジョージア州の宗教的な状況に関して言えば、1735年にウェスレー (Wesley) 兄弟〔メソジスト派〕が英国教会派の後援で、この地方に布教の目的で来訪しており、そのあとジョージ・ホワイトフィールド (George Whitefield) [長老派] も布教を試み、さらにはルーテル派の教会の設立の動きもあり、州全体としてリバイバル (信仰復興) の気運が高まっていたが、そのような中で、バプテスト派の信仰が黒人奴隷たちの間に受け入れられたことは注目値する。しかし黒人奴隷たちの場合は、聖日に礼拝に出席するためでも、主人の文書による許可を必要としたこともあり、教派間の対立もあって、バプテスト派の黒人奴隷たちの布教は遅々として進まなかった。

しかし、1788年に黒人の説教師を伴ったバプテスト派の白人牧師エイブラハム・マーシャル (Rev. Abraham Marshall) の来訪があり、一日のうちに45人もの黒人奴隷たちにバプテスマを授けるということもあって、マーシャル師は1788年1月20日に黒人バプテスト教会を組織し、アンドルー・ブライアンを牧師として任職し、アンドルーに福音を説き、聖礼典を執行する権限を与えた。

こうして、ここに黒人奴隷の信徒たちだけで構成されたバプテスト教会が発足するのであるが、この教会に対しては絶えず他の教派の教会からの圧迫があり、また、礼拝に出席しようとした黒人信徒たちが「正式の通行証を身につけていない」廉で逮捕されたり、白人市民に対する陰謀を企んでいるとして牧師のアンドルー・ブライアンほか50人ほどの黒人信徒たちが逮捕・拘留され、さらには、その集会所が没収される、という苦難が続いた。それでも、その後ほぼ二年間、アンドル

一の主人の大農園の納屋を集会所として礼拝を守ったこのバプテスト教会は、理解のある白人市民の金銭上の援助もあって、教会の敷地を購入し、教会堂の建設が黒人信徒たち自身の手で1794年の後半に始められた。

ここで、この黒人バプテスト教会の発足をめぐる諸問題について言及しておく、バプテスト派の諸教会の間でもマーシャル師ひとりによる黒人奴隷アンドルー・ブライアンとの任職に関する疑義が、しばらくの間、消えなかったこと、さらには、この黒人教会の教会としての正当性が疑問視されたことを指摘しておかなくてはならない。また、黒人奴隷の信徒たちをバプテスト派の白人教会に受け入れてはどうか、という提案もありはしたもの——現に、その後、白・黒両人種の信徒を会員とする「混合」教会も出現するが——アメリカ黒人の「体質的な特異性」(“constitutional peculiarities”) [肌の色の黒さや体臭など]のために、白人信徒たちが礼拝で黒人奴隷の信徒たちと同席することを好まない、という理由で、黒人奴隷の信徒だけで構成される教会の発足も已むを得ないとする見解が支持されたことも、見落とされてはならない。

著者は本書の「まえがき」(“Preface”)で、「一世紀前、神はジョージア州に黒人種のバプテスト教会を創設することを良しとされ、その成長をはぐくみ、その枝を拡げ、今やこの州には、この特異な民の連盟が30以上、教会が1,400、会員数16万人が存在する」(5頁)と書いているが、このアメリカ最初の黒人バプテスト教会の百年の歴史が神の祝福の連続であった、とは言えない。本書によれば、その長い歴史の中で、この教会は、少なくとも二つの大きな試練を経験している。

そのひとつは、初代の牧師アンドルー・ブライアンの甥に当たる二代目の牧師アンドルー・C・マーシャル(Andrew C. Marshall)が、その在任中(1815—1832)に説教者とし

て招聘したアレキサンダー・キャンベル博士(Dr. Alexander Campbell)の説く異端的な教理に共鳴して、教会が二分されたことである。アンドルー・C・マーシャルは過半数の信徒を連れ出して、新しい教会を組織し、残された少数の信徒たちは白人教会の庇護のもとに初代教会の伝統を辛うじて守ることができたが、1831年の時点で2,795人であった会員数は、1833年には398人に激減していた。また、その結果、黒人牧師の任職には、按手礼を受けた三人の牧師の上申に基づく郡の下級裁判所と市長の許可が必要とされることになり、このことが黒人バプテスト教会の独立性を甚しく損うことになった。

次に、もうひとつの危機は、本書が執筆された時期の、九代目の牧師ユリシーズ・L・ヒューストン(Ulysses L. Houston)が南北戦争後のいわゆる「再建期」に、一期だけではあるがジョージア州の下院議員を勤め、牧会の面で十分な責任を果たせなかった隙を衝いて、執事職の一人が、牧師の地位を篡奪しようとしたことである。この事件は、教会堂に警吏を導入するまでに発展するが、ヒューストン師の地位は守られて、事なきを得た。しかし、ここには、バプテスト教会の教会政治の盲点が垣間見られると言えなくもない。

総じて本書は、客観的な歴史記述を志す姿勢に貫かれており、アメリカ黒人におけるキリスト教体験の意味についての深い洞察を欠くとは言え、数少ない黒人教会史の一冊として、興味深い資料を提供してくれる。なお、巻末には、このアメリカ最初の黒人バプテスト教会の教会規則や歴代の牧師たちの略伝が掲載されていて参考となる。

James M. Simms, *The First Colored Baptist Church in North America* (1888, Reprinted 1969. Negro Universities Press) 264 pp.